台大日本語文研究第 43 期
2022 年 06 月，頁 33-62
2022-03-31 收稿，2022-06-01 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202206_(43).0002

I Am a Cat 中的「不可譯性」：主體性・作品類型・藝術・文本規範・宗教性

吳勤文*

摘要

本研究考察夏目漱石《我是貓》之英譯本 ，Katsue Shibata; Motonari Kai 譯 *I Am A Cat* 及 Aiko Itō; Graeme Wilson 譯 *I Am a Cat*。採用 Emily Apter 所提出之「不可譯性」為方法，以主體性、作品類型、藝術、文本規範、宗教性為核心，揭示原作與英譯之文化背景，並觀察兩英譯本之通時性變化。

個別事例考察結果如下。(1)英譯本呈現從直譯到將訴求人類平等的英文學傳統運用到翻譯上的變化。(2)俳句在英譯本中呈現為已被認識的作品類型，然而英譯本對於俳句背景的認識程度不深。(3)不同於具有日本鳥獸畫背景的原作，英譯本（後者）在「繪畫」的解釋上可看出對英國“Picturesque”的認知。(4)關於原作中的「漢文脈」，英譯本譯出了專有名詞的部分，卻無法完全掌握文脈含義。(5)英譯以基督教的詞彙取代原作中的佛教語。

關鍵詞：夏目漱石、*I Am a Cat*、英譯本、不可譯性、跨文化理解

* 國立臺灣大學日本語文學系專案助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

On the Untranslatability of *I Am a Cat*: Subjectivity, Genre, Art, Textual Norms, and Religion

Ching-wen Wu*

Abstract

This study investigated two translations of Sōseki Natsume's *I Am a Cat*: one by Katsue Shibata and Motonari Kai, and the other by Aiko Itō and Graeme Wilson. Based on Emily Apter's concept of Untranslatability, the study clarified the cultural backgrounds of the original text and the English versions. The results were as follows: (1)The English translation showed a change from the literal translation to bring to the fore the human equality by presenting the tradition of English literature. (2) In the English translated works, the haiku genre related to the original text's creative background is well established, but the understanding of the haiku is not deepened. (3) Unlike the original text with the background of Japanese-style paintings of birds and beasts, the later English translated work presents the understanding of picturesque views. (4) Regarding the contexts of Chinese classics used in the original text, the proper nouns are translated into English counterparts, but some of the meanings of the contexts are not understood thoroughly by the translators. (5) The English translation replaces vocabulary of Buddhist with Christian vocabulary.

Key words: Sōseki Natsume, *I Am a Cat*, English translated works, Untranslatability, cross-cultural understanding

* Project Assistant Professor of Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

I Am a Cat における「翻訳の不可能性」: 主体性・ジャンル・芸術・文章規範・宗教に関する考察

呉勤文*

要旨

本研究は、夏目漱石の『吾輩は猫である』の英訳本、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳 *I Am A Cat*、及び Aiko Itō; Graeme Wilson 訳 *I Am a Cat* を考察の対象として、二つの英訳本に見られる通時的変化を観察し、Emily Apter の提示した「翻訳の不可能性」という概念を踏まえ、主体性、ジャンル、芸術、文章規範、宗教性を中心に、原作と英訳の文化的背景を明らかにしたものである。

個別の事例を考察した結果は以下の通りである。(1)英訳は直訳から人間の平等を訴える英文学の伝統を前面に出すようになっている。(2)英訳では、原作の創作背景に関わる俳句というジャンルが定着しているが、俳句の背景に関する訳者の理解が深まっていない。(3)「画」の解釈をめぐって、日本の鳥獣図という背景を持つ原作と異なり、英訳にはイギリスのピクチャレスクの認識が見られる。(4)原作の「漢文脈」に関する固有名詞の部分は英訳されたが、文脈の持つ意味が把握されていない箇所が見られる。(5)英訳は原作の仏教語をキリスト教の言葉に置き換えている。

キーワード：夏目漱石、*I Am A Cat*、英訳本、翻訳の不可能性、異文化理解

* 国立台湾大学日本語文学科専案助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

I Am a Cat における「翻訳の不可能性」:
主体性・ジャンル・芸術・文章規範・宗教に関する考察

呉勤文

一、研究の背景と範囲

日本は 2010 年より猫ブームを迎え始めた。ネコノミクス（nekonomix）という新しい造語・流行語は 2015 年に用いられるようになった。この用語は、日本各地にできた猫カフェ、書店で流通している猫本、または駅や観光地で生活する猫たちの魅力が引き起こした経済現象を指す言葉である。宮本勝浩の「ネコノミクスの経済効果」、「2022 年コロナ禍の『ネコノミクス』」[1]には、ネコノミクスの経済効果の数値に関する推定結果が記されている。

興味深いことに、猫ブームと重なって、ある小説が英米の読書市場で売れている。夏目漱石（1867-1916）『吾輩は猫である』(『ホトトギス』、1905 年 1 月 1 日～1906 年 8 月 1 日)の英語訳本、タトル社版の *I Am a Cat* である（Sōseki Natsume. *I Am a Cat I*. Trans. Aiko Itō; Graeme Wilson. Tokyo: Tuttle, 1972; *I Am a Cat II*. Rutland, Vermont: Tuttle, 1979; *I Am a Cat III*. Rutland, Vermont: Tuttle, 1986; *I Am a Cat*. Tokyo: International Kodansha, 1998; Boston: Tuttle, 2002; Tokyo: Tuttle, 2002.）[2]。タトル社は、1832 年にアメリカにおけるイギリス人の移住地ラトランド郡で創立され、北アメリカに拠点を持つ一方、ラテンアメリカ、ヨーロッパ、日本、アジア太平洋にも書籍の販売ルー

---

1 関西大学プレスリリースに掲載されている公表内容によると、「ネコノミクスの経済効果」の推定は「2015 年 1 年間で約 2 兆 3,162 億円」だった（『関西大学プレスリリース』2016 年 2 月 5 日／No.44）。「2022 年コロナ禍の『ネコノミクス』」の推定は「2022 年約 1 兆 9,690 億円」となっている（『関西大学プレスリリース』2022 年 2 月 17 日／No.56）。

2 入手した資料を確認したところ、Sōseki Natsume. *I Am a Cat*. Trans. Aiko Itō; Graeme Wilson.は、タトル社東京オフィスを拠点とした。2002 年にボストンと東京で刊行されたそれぞれの書籍は、ISBN の違いだけあり、内容は同じである。二冊とも *I Am a Cat I*, *II*, *III* の訳を全部収録している。日本の英語教育向けの講談社英語文庫版は前記の翻訳の一部しか収録していない省略版である。

臺灣大學學術機構典藏庫

トを設けている。ラトランドの本社は、インターネットのホームページ上で、“Books to Span the East and West”[3]（東と西を繋げる本）という理念を掲げている。グレイム・ウィルソン（Graeme McDonald Wilson, 1919-1992）[4]と伊藤愛子の共訳の *I Am a Cat* の著作権ページには、タトル社の出版のメッセージが次のように記されている。

> The world has become a smaller place today and Asia's economic, cultural and political influence has expanded, yet the need for meaningful dialogue and information about this diverse region has never been greater. Since 1948, Tuttle has been a leader in publishing books on the cultures, arts, cuisines, languages, and literature of Asia.[5]（日本語訳：世界は日々小さくなっていく。アジアの経済、文化や政治的影響力は拡大しているが、この多様性を持つ地域に関する有意義な対話と情報の必要性はかつてないほど高まっている。タトル社は、出版界の先頭を切って、1948 年よりアジアの文化、芸術、料理、言語、文学に関する書籍を刊行してきた。）

現在、書店で流通している[6]*I Am a Cat* は、2002 年版（ボストン刊行及び東京刊行）である。

実際に、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳の *I Am A Cat* はタトル社版の流通と一時期重なり、日本と英語圏で流通していた（Sōseki Natsume. *I Am A Cat*. Trans. Katsue Shibata; Motonari Kai. In collaboration with Harold W. Price. Tokyo: Kenkyusha, 1961; London:

---

[3] サイトページ：https://www.tuttlepublishing.com/about-us/our-story（検索日：2022 年 3 月 28 日）。

[4] グレイム・ウィルソンは *I Am a Cat* 以外に、以下の訳本がある。Sōseki Natsume. *Ten Nights of Dreams, Hearing Things, The Heredity of Taste*. Trans. Graeme McDonald Wilson; Aiko Itō. Boston: Tuttle Publishing, 2005.

[5] Sōseki Natsume. *I Am a Cat*. Trans. Aiko Itō; Graeme Wilson. Boston: Tuttle, 2002; Tokyo: Tuttle, 2002. p.ii.

[6] 筆者の実地の調査によると、2021 年 7 月までに、日本の丸善書店では、*I Am a Cat*. Trans. Aiko Itō; Graeme Wilson. Tokyo: Tuttle, 2002.が流通していた。2022 年 3 月までに、台湾の誠品書店では、*I Am a Cat*. Trans. Aiko Itō; Graeme Wilson. Boston: Tuttle, 2002.が流通していた。ネット書店でのオンライン販売もある。（ウエブサイト：https://www.eslite.com/product/1002138151290352, https://honto.jp/netstore/pd-book_29288847.html）

臺灣大學圖書館版權所有

Peter Owen, 1971; New York: Putnam, 1982.）[7]。研究社版は文芸評論家の柴田勝衛（1888-1971）とその弟子の甲斐元生が共訳し、英語の表現について同志社大学で教えていた Mr. Harold W. Price の協力を得たことによる成果である。柴田はその序文において、『吾輩は猫である』の娯楽性が漱石の『坊っちゃん』に影響を与え、これらの小説には洗練された文体があるために日本の社会で人気を得た[8]、というように翻訳対象作品の選定の背景について記している。特に、その翻訳を複写した Peter Owen 社版は、Japanese Series of the Translation Collection of the UNESCO に収録されている。

日米関係に基づいた日本文学翻訳計画は長年の歩みを経てきた。塩野加織「ユネスコによる日本文学代表作品翻訳計画――その成果と課題」の指摘[9]によると、敗戦後の日本は、国連教育科学文化機関における世界文学英訳プロジェクトに積極的に参与し、アメリカアカデミの著名な学者との協働で日本文学を翻訳してきた。夏目漱石は日本近代文学を代表する一人の作家として知られるゆえ、英訳プロジェクトを通じて英語圏に紹介されてきたという。漱石作品の英訳本について、筆者が「国際交流基金日本文学翻訳作品データベース」で調査した結果[10]、『こゝろ』（『東京・大阪朝日新聞』1914 年 4 月 20 日～8 月 20 日）、『坊っちゃん』（『ホトトギス』第 9 巻第 7 号、1906 年 4 月 1 日）に次いで、『吾輩は猫である』が 3 番目に多く翻訳されてきた作品であることが分かった。にもかかわらず、漱石の英訳本に関するこれまでの研究は、『こゝろ』、『坊っちゃん』に集

7 入手した資料を確認したところ、どの版も同じ内容で形式も同じである。序文の内容も研究社版と同じである。

8 Katsue Shibata. ‘TRANSLATOR’S PREFACE.’ Sōseki Natsume. *I Am A Cat*. Trans. Katsue Shibata; Motonari Kai, Tokyo: Kenkyusha, 1961; London: Peter Owen, 1971; New York: Putnam, 1982.

9 塩野加織（2020）「ユネスコによる日本文学代表作品翻訳計画――その成果と課題」『越境する歴史学と世界文学』臨川書店、pp. 185-194。

10 データベースに登録されている出版件数による筆者の統計結果では、『こゝろ』は翻訳件数が 48 件、英訳が 7 件ある。『坊っちゃん』は 47 件、英訳が 13 件ある。『吾輩は猫である』は 34 件、英訳が 7 件ある（検索日：2022 年 3 月 28 日）。（このデータベースが収録していない中国語版は、次の文献が参考になる：廖詩文（2015）「夏目漱石的小說在臺灣」『編譯論叢』第 8 卷第 1 期。）

臺灣大學學術期刊論文授權

中[11]し、Edwin McClellan や J. Cohn らアカデミの著名な訳者を得た *Kokoro*, *Bocchan* に対して、*I Am A Cat* は英訳研究において注目されてこなかった。

Katsue Shibata; Motonari Kai 訳の *I Am A Cat* がすでに絶版となったことから窺えるように、タトル社版のほうが積極的にグローバル市場に進出してきた。その流通時期（*I Am a Cat I*. 1972-1994; *I Am a Cat II*. 1979-1997; *I Am a Cat III*. 1986-1995; *I Am a Cat*. 2002-2022 現在）から、タトル社版 *I Am a Cat* は英訳本の中のロングセラーであることが窺える。タトル社版は冒頭の作者の紹介において、より詳しく、夏目漱石における学問の背景、及び『ホトトギス』の編集者だった高浜虚子の勧めで『吾輩は猫である』が成立したということ[12]を読者に紹介している。漱石における西洋文学の影響に触れながら、日本近代作家としての漱石の作品における画期的な意義を次のように指摘している。

> Perhaps the most significant aspect of Sōseki's work is that, while deeply conversant with Western literature and while sharply and persistently critical of Japanese society, he remained unswamped (even, perhaps, unimpressed) by Western enlightenment.[13]（日本語訳：おそらく、漱石の作品の最も重要な側面は、西洋文学に深く精通し、日本社会に鋭く且つ粘り強く批判する一方で、西洋

[11] 筧寿雄（1975）「ばった騒動記―漱石「坊ちゃん」の英訳について」『神戸大学文学部紀要』第 5 号、pp.1-30。中野圭子（1975）「"異質文化間における文学作品の翻訳は可能か?"―夏目漱石「坊ちゃん」の英訳（日本人と米国人とによる）にみる諸問題」*Annual reports of English and American literature*. (12)、pp.36-59。岡田章子（1978）「「こころ」の英訳をめぐって――McClellan 訳と近藤いね子訳の比較」『桃山学院 大学総合研究所報』第 4 巻第 1 号、桃山学院大学総合研究所、pp.47-55。斉藤恵子（1990）「2 つの KOKORO――マクレラン訳と近藤いね子訳」『比較文学研究』第 57 号、東大比較文学会、pp.57-70。エドウィン・マックレラン（1992）「『こゝろ』の翻訳について」鶴田欣也編『漱石の『こゝろ』――どう読むか、どう読まれてきたか』新曜社。徳永光展（2017）「夏目漱石『心』における英訳の変遷」『世界の日本研究』、国際日本研究センター、pp. 307-321。

[12] 『吾輩は猫である』の成立背景について、タトル社版（p.vi.）の依拠した文献は、漱石の手紙の内容に基づいて書かれた高浜虚子（1918）『漱石氏と私』（アルス、p.87）である。

[13] 前注 *I Am a Cat*. Boston: Tuttle, 2002; Tokyo: Tuttle, 2002. p.x.

臺灣大學學術期刊資料庫

式の文明開化に圧倒されない（恐らく感銘を受けない）ことだろう。）

その後、タトル社は日本の猫ブームに乗り、漫画家の小鳩チロルの『吾輩は猫である』（ホーム社、2010 年）（夏目漱石の著作の漫画翻案作品）を日米友好基金日本文学翻訳賞 2014 年の獲得者 Zack Davisson に英訳してもらい、2021 年 8 月 27 日に英訳漫画を販売し始めた（Chiroru Kobato. *Sōseki Natsume's I am a Cat: The Manga Edition: The tale of a cat with no name but great wisdom!*. Trans. Zack Davisson. Tuttle publishing, 2021.）。

以上のように、『吾輩は猫である』の英訳は、戦後60年以上にわたり、英米で大衆の読者を得て、日本の英語教育市場にも進出し、さらにポップカルチャーの出版に拍車をかけてきた。その翻訳の内容が持つ意味を改めて検証することに意義があると思われる。

二、研究方法と問題意識

アメリカの翻訳家・歴史家 Lawrence Venuti（2008）による『翻訳者の不可視性』という画期的な著作[14]が、翻訳における「国」（Nation）や「カノン」（Canon）の存在を指摘し、「同化」（domestication）と「異化」（foreignization）という概念を提示した。「同化翻訳」は目標テクスト（target text）や目標文化（target culture）の文脈や価値観に即す訳し方である。一方、「異化翻訳」は起点テクスト（source text）や起点文化（source culture）の文脈や価値観を残す訳し方である。Venuti によると、「同化・異化」は単純な二分法よりも、テクストや翻訳ストラテジーを選択する際に、外国の著作に向ける「倫理的な」態度に基づいた手法である。しかし、「異化翻訳」は必ずしも原文通りの内容を伝える手法ではない。というのは、起点テクストや起点文化の価値観は、必然的に目標言語を用いて対応の概念として再構築されるからである。にもかかわらず、Venuti は、「同化翻訳」に示

[14] Venuti, L. (2008). *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. New York: Routledge.（2008 年版は初出の 1995 年版を大幅に加筆・修正した。）

臺灣人文學術期刊資料庫

される目標文化の支配的な価値観に対して、起点文化の周縁性、非標準性、説明のつかない部分や新たな概念が提示できる「異化翻訳」を推奨した[15]。一方、山本史郎がすでに指摘した[16]が、欧米の翻訳市場では、むしろ読者にとって読みやすい「同化翻訳」が主流である。英訳本における文化伝達の役割について考察する本研究は、以上の認識の土台を踏まえなければならない。ただし、Venuti が指摘した「説明のつかない部分」について、別の視点から考えたい。

「翻訳の不可能性」（Untranslatability）という概念は、日本において文化的・宗教的語彙の持つ個別的な文化的背景で翻訳が不可能になることとして認識されていた[17]。アメリカの研究者 Emily Apter（2013）は、その著書（*Against World Literature: On the Politics of Untranslatability*. London, New York: Verso.）の序文において、世界の体系から「翻訳の不可能性」について考察を行った。

Apter の指摘によると、英語圏及びフランス語圏を中心にグローバルに広まってきた「世界文学」という概念は、「翻訳の可能性」（translatability）の仮設に成り立っている[18]。この点について、第 1 部第 1 章‘Untranslatables: A World-System’における指摘によると、ゲーテの Weltliteratur の血脈を引いた「世界文学」は、比較文学に埋め込まれた一つのモデルである。その役割は開かれた包含性、または文化の相似性に関する論述の形の構築を促進することにあるが、それに伴う政治的批判の鈍さが見られる（p.41）。翻訳による読書市場の均一化をもたらしている世界文学に対抗するために、Apter は Barbara Cassin（2004）の著書（*Vocabulaire européen des philosophies: Le Dictionnaire des intraduisibles*.）を自分の研究のコンテクストとして、「非翻訳」（non-translation）、「誤訳」（mistranslation）、「比較不可

[15] 前注 Venuti, L. (2008). ‘Invisibility’. pp.19-20.
[16] 山本史郎（2020）「『同化翻訳』と『異化翻訳』―アメリカの翻訳者には顔がない―」『翻訳の授業』朝日新聞出版、pp.38-54。
[17] 法政大学国際日本学研究所編集（2010）『翻訳の不可能性』法政大学国際日本学研究センター。管見の限りでは、Apter の論考はまだ漱石の英訳研究に応用されていない。
[18] Apter, E. (2013). ‘Introduction’. *Against World Literature: On the Politics of Untranslatability*. London, New York: Verso. p.3.（以下頁数のみ本文で記す。）

臺灣大學圖書館期刊資料庫

能性」(incomparability)、及び「翻訳の不可能性」(Untranslatability)の重要性を見出す(pp.3-4)。

Apter は翻訳研究の始源をルネサンス期の「翻訳学」(translatio studii)に遡り、「人間性」(humanity)の探求を重要視する。その着眼点から、「世界」(world)はハイデッガー(Martin Heidegger, 1889-1976)によって、“finitude”(有限)、“individuation”(個別性)という概念と一緒に思索されてきたのが分かる。その言葉自体には異なる世界体系における「翻訳の不可能性」の概念が含まれている(p.9)。そこで、Apter は「翻訳の不可能性」という方法論の可能性について、“Oneworldedness”(一つの世界に包含されていること)や“literary world systems”(文芸の世界体系)といった様々なトポイ(場)から考えることができると提案した(p.16)。比較文学研究では語彙修正や文化背景の相互参照という現象が見られるが、翻訳研究の導入が、越境性に内在する国境という比較文学研究の矛盾に解決法を見出すことができると述べている(pp.39-42)。

本研究は、Apter の論考をすべて応用することができないが、その著書の第 1 部において指摘された「翻訳の不可能性」の要点を分析の手がかりにしたい。まず、第 1 章‘Untranslatables: A World-System’の冒頭で、「人間性」に関する人称“I”の翻訳不可能性について、Apter は前掲の Barbara Cassin の著書を手がかりにして、各言語体系における同一語彙の多元的な広がりに着眼した(p.32)。第 2 章‘Moretti’s Literary World-Systems’で、「翻訳の可能性」を市場と進化論の側面から考えたイタリアの歴史家 Franco Moretti の観点を紹介し、テクストが異なる文化の土壌に移植して極度の異質性に出会った場合、新しいジャンルが生まれてくる可能性があるという考えを示した(pp.49-50)。一方、第 3 章‘Eurochronology and Periodicity’の冒頭で、「印刷された芸術」を発展してきたヨーロッパ地域における文学の時期や芸術のジャンルの規範が、「世界文学」の展開においてほかの地域の文芸に当て嵌められてしまうという問題があると指摘した(pp.57-58)。第 4 章‘Paranoid Globalism’では、文化の覇権主義を可視化

臺灣大學學術期刊資料庫

させる“Oneworldedness”という言葉に関する認識の重要性を指摘した（pp.71-72）。また、その議論と関連して、第 5 章‘Checkpoints and Sovereign Borders’において、キリスト教の観念で“Allah”を“God”に翻訳する標準的な英語翻訳の傾向を指摘している（p.99）。

本論は以上の要点を踏まえ、『吾輩は猫である』（以下、略称『猫』）の英訳を分析する。まず、それと関連する『猫』の創作の特質について紹介しておく。『猫』の成立は、病気でなくなった正岡子規のことと深い関わりを持っている[19]。その掲載媒体であり、俳句雑誌の『ホトトギス』は、その表紙絵に示されているように、西洋絵画における「写生」（sketch）の概念を俳句に取り入れている。俳人グループの「山会」で朗読されていた『猫』は、実際に「写生」の概念を踏まえた「写生文」である。『猫』には俳句関連の表現が見られる以外に、漢語、故事成語も多く取り入れられている[20]。作品の内容に関して、作品の語り手「猫」は「吾輩」という人称を用いている。書生に捨てられた猫は、誰かに破られた竹垣の穴のおかげで苦沙彌の家に入ることができた。猫は、観察眼で人間世界の苦楽を味わい尽くし、最後に西洋伝来のビールを飲んで水の入っている甕に落ち、

[19] 森まゆみ（2017）「「ホトトギス」創刊」『子規の音』（新潮社、p.301。）の考察によると、『ホトトギス』は正岡子規に師事した柳原極堂によって創刊された俳句雑誌である。誌名は子規という俳号に因んだものである。夏目漱石「序［『吾輩ハ猫デアル』中編］」（明治三十九年十月）（『漱石全集』16 巻、岩波書店、2019 年、pp.35-36。）によると、子規の俳句会に参加したことがある漱石は、連載小説『吾輩は猫である』を単行本（上中下三冊）にする際に、わざわざ中編自序で、亡き子規の書簡内容を引用して次の追悼の内容を記した。「子規がいきて居たら「猫」を読んで何と云ふか知らぬ」「季子は剣を墓にかけて、故人の意に酬いたと云ふから、余も亦「猫」を碣頭に献じて、往日の気の毒を五年後の今日に晴さうと思ふ。」子規は漱石のイギリス留学の間に、病の慰めのために「倫敦消息」の続きのような逸話を求めたが、研究で忙しかった漱石が書かない間に子規が亡くなった。この背景について、俳句の視座から漱石の小説に着眼した西村好子（1998）「子規と『吾輩は猫である』」『散歩する漱石』（翰林書房、p.61。）は、「ゆえに、まず『猫』にはおもしろい話の集成という骨格が抜き難く存在する。さらに、そのおもしろい話の背後には、亡くなった子規が佇んでいる」と指摘した。

[20] 子規は『俳諧大要』（『日本』日本新聞社、明治 28 年 10 月 22 日～12 月 31 日）で、初心者向けの「修學第一期」として「雅語俗語漢語佛語何にても構はず」と教えている。（正岡子規（1975）『子規全集』第 4 巻、講談社、p.349）西村は、「故事成語を典拠とし漢語を使用し、佶屈としたリズムを持つ」「日本派の『新調俳句』」に参与した俳句初心者だった漱石のことを指摘した。（西村好子（1998）「漱石の俳句世界」『散歩する漱石』翰林書房、p.11。）

「南無阿弥陀仏」と唱えながら「不可思議の太平に入る」（p.568）。つまり、『猫』は仏教思想を色濃く反映する作品でもある。本論では、原文と英訳における主体性、ジャンル、芸術、文章規範、宗教といった要素を中心に分析と考察を行う。

三、本論

（一）「吾輩」と“I”の間

原作は、猫を視点人物とし、「吾が輩は猫である。名前はまだ無い」[21]という語りで始まる。「吾輩」は、古語では尊大さを含む表現であるが、江戸語では男性の謙遜の自称[22]として使われていた。高浜虚子は当時、文章会で朗読された「吾輩は猫である」という言葉について、みんな「兎に角變つてゐる」[23]という反応を示したと記述した。言語発展の過程より、「吾輩」は謙遜の意味で理解されるはずだが、その表現に可笑しさが感じられるのは、謙遜に断定を表す常体の「である」が用いられているのだと考えられる。

小説名の英訳“I am a Cat”は、安藤貫一による *I am a Cat*（1906）が最初のもの[24]である。もとより、日本語の「吾輩」も英語の“I”も人称である。猫が自意識を持ち、人間のように語り出すことを示す言葉である。安藤訳を踏襲した Katsue Shibata; Motonari Kai 訳は“I AM A CAT”と訳し、そして Aiko Itō; Graeme Wilson 訳は“I AM a CAT”と訳している。その訳に関して、前者は特に説明を入れていないが、後者は序文において、「吾輩」という言葉の持つニュアンスを次のように説明し、尊大さの意味で捉える訳者の不可視性を示している。

> Sōseki’s brilliant and extremely concise use of the Japanese language makes all his writings difficult to translate. In the case of this particular book, difficulty arises with the very first word of its

[21] 夏目漱石（2017）『漱石全集』1巻、岩波書店、p.3。
[22] 前田勇（1975）『江戸語大辞典』講談社、p.1057。
[23] 高浜虚子（1918）『漱石氏と私』アルス、p.87。
[24] 漱石の反応について、詳しくは、塚本利明（2018）「『吾輩は猫である』とその周辺」『漱石と英文学 II』（彩流社、p.126）が参考になる。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

title, *Wagahai wa Neko de Aru*. There being no English equivalent for the Japanese word *Wagahai*, the main significance of that title, the comic incongruity of a mere cat, a mere stray mewling kitten, referring to itself in so lordly a manner, cannot be conveyed to the English reader.[25]（日本語訳：漱石の見事で極めて簡潔な日本語の使い方が彼の文章の翻訳を困難にする。この特定の本の場合、タイトルの「吾輩は猫である」における最初の単語で困難が生じる。日本語の「吾輩」の意味に相当する英語はない。そのタイトルの主な意義は、ニャーニャー鳴くちっぽけな迷い猫の自己言及の堂々しさに示されるこっけいな違和感である。ところが、英語では、この違和感は読者に伝わらない。）

猫の自称をそのまま“Wagahai”にする場合、英語圏の読者にとって決して読みやすいものにならない。そのため、英訳本のタイトルと本文で「吾輩は猫である」は“I Am A CAT”（p.3）と訳されている。英語の全大文字（All Capital Letters）は、固有名詞、語勢、強調を示すための表記である。“I Am A CAT”という訳では、原文の文体が持つ不対称な滑稽感は伝わらないが、その訳に名前もない猫の主体性を前面に出す翻訳の努力が払われていると言える。

実際に、原作は（一）、（二）の部分のみ猫の世界が描かれ、知り合いの三毛子の病死、そして黒猫の頽廃により、（三）からは猫が人間世界の観察者になる。猫の言語が日本語なのか議論する主人夫婦の日常会話に現れている「比較研究」（p.304）という言葉は、動物にも人間の心理現象があるという学説を提起したモルガンの進化論心理学の著作『比較心理学』を読んでいた[26]漱石の知的教養に由来する表現だと考えられる。「吾輩も亦人間界の一人だと思ふ折さへある位に進化したのは頼母しい」（p.87）という猫の論理は、まさに進化論心理学によって裏付けられたものである。この進化論の文脈をめ

[25] 前注 *I Am a Cat*. Boston: Tuttle, 2002; Tokyo: Tuttle, 2002. *I Am a Cat*. p. x.
[26]「漱石山房蔵書目録」にある Morgan, C. L. (1894). *An Introduction to Comparative Psychology*, London: W. Scott.に関する書き込みが残されている。

臺灣大學圖書館資料庫

ぐって、「吾等の性質」（p.24）について、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳“our character”（p.17）と Aiko Itō; Graeme Wilson 訳“our characters might be characteristic”（p.19）には、猫の擬人化の側面が反映されている。一方、「吾輩も亦人間界の一人だと思ふ折さへある位に進化したのは頼母しい」（p.87）という箇所に関するそれぞれの訳“I actually believe myself to be a human being.”（p.73）“I have developed, indeed evolved, to such an extent that there are now times when I think of myself as just another human in the human world.”（p.70）について、後者のほうが「進化」の文脈を忠実に訳し出している。

猫の自意識は、「元来人間が何ぞといふと猫々と、事もなげに軽侮の口調を以て吾輩を評価する癖があるは甚だよくない」（p.23）という語りの内容から窺えるように、人間と動物の関係性における不平等に起源したものである。人間の世界に入り込んだことで、金満家の金田による人間差別にも気づいた猫は、「承る処によれば人を人と思はぬ病気があるさうである。人を人と思はない位なら猫を猫とも思ふまい」（p.143）と語る。Katsue Shibata; Motonari Kai 訳の直訳[27]に対して、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳は次のような興味深い訳の内容を示している。

> However, from what I’ve seen and heard, Goldfield has his own unpleasant quirks and is certainly not disposed to accept that a man’s a man for a’that. If Goldfield is overbearing with his fellowmen, how would he treat a cat?（p.122）

“a man’s a man for a’that”は、フランス革命を支持したイギリス前期ロマン派詩人バーンズ（Robert Burns, 1759-96）の作曲“A Man’s a Man for a’that”（1795）である。“Is there for honest Poverty/ That hangs his head, and a’ that”[28]に始まるこの曲では、人間はどれほど貧乏であ

[27] “according to my understanding, it seemed as if he did not think of men as men. And if he did not believe men to be men, he would certainly not consider a cat a cat”（前注 Tokyo: Kenkyusha, 1961; London: Peter Owen, 1971; New York: Putnam, 1982. pp.122-123.）

[28] 「漱石山房蔵書目録」にある Burns, R. (1896). *Poetical Works of Robert Burns: The Poems, Epistles, Songs, Epigrams and Epitaphs*. Ed. by J. A. Manson. 2 vols.

臺灣人文與藝術期刊資料庫

っても尊厳を持つという内容が歌われている。漱石の蔵書にはバーンズの詩歌集があるが、『猫』の注釈に出ていないこの英文学の背景について、タトル社版の訳者は漱石の蔵書まで調べたという形跡を示していない。むしろ、グレイム・ウィルソンが人間の平等を歌う“A Man's a Man for a'that”という有名な曲をパロディーのように翻訳に使っている。人間の平等性を求める英文学の伝統を示すことによって、訳文に新鮮さと面白みをもたらしている。その一方、漱石の作品で今まで外国文学の受容の痕跡が判明されていない箇所に新たな比較文学研究の視野を与えてくれる。

主人の家に居候次第で膨らんでいった猫の自意識という文脈の存在により、「吾輩」の持つ意味は英訳において変化を示す。居間の座布団をめぐる来客と猫の暗闘を描いている場面において、「傲然と構へて、丸い無愛嬌な目をぱちつかせて、御前は誰だいと云はぬ」態度を取る猫は、「申す迄もなくそれはかく申す吾輩である」（p.158）と語る。この箇所について、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳“There is no need to mention that the cat was me—The Cat—and nobody else!”（p.132）は猫の自己言及を強調している。一方、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳は、“I need hardly add that the cat in question is my lordly self”（p.133）というように猫の尊大ぶりを訳し出している。英訳は日本語文脈に示される猫の主体性を語彙の次元で表現している。

（二）「俳句」、“poem”、“haiku”

『猫』には俳句に関する言葉がある。例えば、猫は「俳句をやつてほとゝぎすへ投書をしたり新体詩を明星へ出したり」（p.9）する主人の創作欲について触れている。この箇所を訳す際に、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳と Aiko Itō; Graeme Wilson 訳の両方[29]とも

London: Clement Wilson. p.174.

[29] 俳句雑誌『ホトトギス』と日本明治後期のロマン主義文芸雑誌『明星』について、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳は“Going in for composing *haiku*, he contributes his poems to the *Hototogisu* magazine, or writes some modern poetry for the *Myojo* magazine”（p.5）と訳した。一方、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳は“He's always writing *haiku* and submitting them to *Cuckoo*; he sends off new-style poetry to *Morning Star*;”（p.7）と訳した。“Morning Star”は、イエス・キリストの象徴である「明けの明星」を指す言葉である。（泉田昭ほか編（1985）『新

「俳句」を“*haiku*”に訳している。その背景として、イギリス出身の日本文化研究者ブライス（Reginald Horace Blyth, 1898-1964）が *Haiku*（The Hokuseido Press, 1949.8-1955.9）を出版したことが考えられる。その時点から、俳句というジャンルは基本的に英語圏に広まってきた。しかし、論文最後の付録（「表一」）に示すように、前掲の箇所以降、前者の訳は「詩」の総称“poem”という訳し方が見られる一方、後者の訳は“haiku”という言葉で訳し続けている。

この翻訳の現象に関するさらなる分析を行うために、「表一」に取り上げている言葉の背景に関する考察の結果を説明しておく。『猫』に見られる「俳体詩」という表現は、高浜虚子と漱石が連歌の形式で俳句を読む「連句」[30]そのものを指す言葉である。また、「俳劇」は小説における虚構の造語である。日本の俳句は俳諧連歌より生まれた近代の韻文である。子規は「俳諧は滑稽なり」[31]と認めつつも、そこから継承した「滑稽体」を俳句の一種類に過ぎないとした。「川柳のひたすらに噴飯せしむる者とは異なり俳句は滑稽のうちに品格あり趣味あるを要す」[32]と述べている。その滑稽の意味が浸透した『猫』の中に描かれている「十七味調唐辛子調」は、俳句の形式と七味唐辛子の駄洒落である。以上、原文の背景に対する理解の上で、「俳体詩」を“extended *haiku*”に訳し、「十七味調唐辛子調」を“spiced each syllable of a *haiku*”に訳している Aiko Itō; Graeme Wilson 訳のほうが英語圏における俳句の定着を反映していると言える。

しかし、俳句がジャンルとして認識されていても、英訳本ではその背景に関する理解が深まっているとは言えない。例として、俳句の滑稽的な側面を踏まえた『猫』（二）の場面を取り上げる。レスト

聖書辞典』いのちのことば社、p.1114。）西洋文学を高踏的、唯美的に日本に紹介する『明星』はもとよりこの意味で命名された。しかし、『ホトトギス』を“Cuckoo”に訳すと、イギリスロマン派詩人ワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850）が創作した“To the Cuckoo”（1807）という四行八連の英詩に連想されやすい。

30 高浜虚子（1918）『漱石氏と私』アルス書店、pp.82-83。

31 正岡子規（1975）「俳諧大要」『子規全集』第 4 巻、講談社、p.356。

32 正岡子規（1975）「俳句二十四體」『子規全集』第 4 巻、講談社、p.426。

臺灣大學機構典藏資料庫

ランの「ボイ」が「鴨のロースか小牛のチャップ抔」を薦める際に、美学者の迷亭は「そんな月並を食ひにわざ〳〵こゝ迄来やしない」（p.47）と言ったようだと、東風によって伝えられている。「君仏蘭西や英吉利へ行くと随分天明調や万葉調が食へるんだが、日本ぢやどこへ行つたつて版で圧した様で、どうも西洋料理へ這入る気がしない」（p.47）という迷亭の衒学的な文句は、子規の俳句観と関連している。「月並」は俳論の用語で、子規が俳句革新の立場から新鮮味を失った伝統的な俳句を指す言葉である。子規は『俳諧大要』において、「天保以後の句は概ね卑俗陳腐にして見るに堪へず稱して月並調といふ」[33]と書いている。「和歌は万葉はたるみてもたるみ方善し」と讃え、蕉風の復興と俳諧の革新を目指した与謝蕪村の句を「天明（蕪村）」「天明調」と呼んでいる[34]。上記の表現に関して、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳“common everyday food”（p.38）、“a lot of dishes which have a flavor of times gone by”（p.38）、及び Aiko Itō; Graeme Wilson 訳“common and garden fare”（p.38）（英語の“common or garden”（非常に普通で平凡）という慣用語の意味）、“*à la Tenmei* or *à la Manyo*”（p.39）（固有名詞の発音を残したまま、フランス語風にして、“in the style of *Tenmei* or *Manyo*”という意味）のいずれも俳句の背景を伝えることができない。特に、後者の表現から、俳句というジャンルがフランス語の影響を受けた英語の言語体系に出会ったことで、あたかも新たなジャンルとして語られているような現象が見られる。

（三）「画」の翻訳における東と西

『猫』の文脈には絵画や芸術の要素も取り入れられている。例えば、主人苦沙彌が友人の迷亭に水彩画を勧められる場面では、迷亭は次のように写生の重要性を語っている。

> 「ア−ン−ド−レ−ア、−デ−ル、−サ−ル−トが言つた事がある。画をかくなら何でも自然其物を写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獣あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉

[33] 前注『子規全集』第 4 巻、p.381。
[34] 前注『子規全集』第 4 巻、pp.386-387。

臺灣人文藝術期刊資料庫

あり。自然は是一幅の大活画なり。どうだ君も画らしい画をかゝうと思ふならちと写生をしたら」（p.10）

アンドレア・デル・サルトはイタリアフィレンツェ派の画家であり、漱石はこの材源をイギリス詩人ブラウニングの詩“ANDREA DEL SARTO(CALLED ‘THE FAULTLESS PAINTER’)”から得た[35]が、その言葉とは思えない原文の背景について考察してみたい。

まず、原文の第三、四句について、漱石蔵書にはないため、確証を挙げることができないが、『淮南子』（西漢、206-9 B.C.）「天文訓」の「日月之淫為精者為星辰，天受日月星辰，地受水潦塵埃」がその典拠だと思われる。五、六句は、江戸時代の狩野探幽筆《飛禽走獣図巻》（1666-1667）（現在、東京国立博物館所蔵）の知識に基づいた内容だと思われる。確証としては、「漱石蔵書文献目録」には、鍬形蕙斎の『鳥獣略画式』（吉川弘文館、文化本再刻版）が見られる[36]。浮世絵に描かれる鳥獣への漱石の関心が『猫』の表現に現れていると考えられる。特に、日本画との関連として、本論は八句の根拠について実証的に考察を行い、漱石の蔵書にある瓜生政和編・河鍋洞郁画『古今暁斎画談』（4 冊）第 4 冊（岩本俊、明治 20 年）と同じ版[37]を調べた。その中には、河鍋洞郁によって写された挿絵「暁斎氏博覧會出品の鴉」第二回内国勧業博覧会（1881 年 3 月 1 日～6 月 30 日）がある。そこから、「枯木に寒鴉」という表現が狩野派に師事したことがある河鍋暁斎の《枯木寒鴉図》から着想を得たものだと判明した。七句の「金魚」に関しては、「吾輩も此頃では普通一般の猫ではない。先づ桃川如燕以後の猫か、クーパーの金魚を偸んだ猫位の資格は充分あると思ふ」（p.28）という語りの内容[38]が見られる。

---

35 前注『漱石と英文学 II』、pp.165-166。

36 夏目漱石（2020）『漱石全集』27 巻、岩波書店、pp.121-124。

37 早稲田大学図書館古書文庫デジタル資料（https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko06/bunko06_01297/）に同じ版が収録され、その第 4 冊に《枯木寒鴉図》に模倣した挿絵がある。

38 『漱石全集』の注解は、「この箇所は単行本以降は「グレー」に直されている」（p.579）と記し、クーパー（William Cowper, 1731-1800）とグレーを混同した漱石の書き間違いを指摘している。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

「金魚」は十八世紀イギリスの代表的な詩人、グレー（Thomas Gray, 1716-71）の「金魚鉢で溺死した愛猫の死を弔う詩」（Ode on the Death of a Favourite Cat Drowned in a Tub of Goldfishes, 1747）に因んだものだと考えられる。

このように、迷亭の言葉には様々な知的背景が混じっているが、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳では、以上の背景を示しない直訳[39]が行われている。一方、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳では、やや異なる意味合いで訳されている。

> "The Italian Master, Andrea del Sarto, remarked that if you want to paint a picture, always depict nature as she is. In the sky, there are stars. On earth, there are sparkling dews. Birds are flying. Animals are running. In a pond there are goldfish. On an old tree one see winter crows. Nature herself is one vast living picture. D' you understand? If you want to paint a picturesque picture, why not try some preliminary sketching?"（p.8）

タトル社版は、「自然」を"she"と呼ぶ。それに、「画らしい画」を、"a picturesque picture"に訳している。この訳の表現は、実際にイギリスロマン主義における「風景」の概念に由来するものである。ウィリアム・ギルビン（William Gilpin, 1724-1804）は、"Observation on the River Wye, and Several Parts of South Wales"（1782）（『ワイ河と南部ウェールズ地方観察報告』）に関する連作の"Observation, Relative Chiefly to Picturesque Beauty"（1786）（『主として絵画美に関しての観察』）という文章で、「風景」（Landscape）におけるピクチャレスクの美の理念を普及させた[40]。ピクチャレスクの流行を受けて、ワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850）は、ウェールズにある中世の

---

[39] "Once the famous Italian painter Andrea der Sarto said that to draw, you have to interpret nature in its original form. The stars in the sky, the earth with flowers shining with dew, the flight of birds and the running animals, the ponds with their goldfish, and the black crow in a withered tree—nature is the one great panorama of the living world. How about it? If you want to draw something recognizable, why not do some sketching?"（p.6）

[40] 松島正一編（1995）『イギリスロマン主義事典』北星堂書店、p.470。

臺灣人文藝術期刊資料庫

ゴッシク建築であるティンターン修道院の廃墟の上流を訪ね、“Lines Composed a Few Miles Above Tintern Abbey, On Revisiting the Banks of the Wye During a Tour, July 13th”(1798)(「ティンターン修道院上流数マイルの地で――一七九八年七月十三日、ワイ河畔再訪に際し創作」)という有名な詩を書いた。以上の背景から窺えるように、いわゆる“a picturesque picture”に示される「風景」(「光と影の混合」やゴシック寺院の廃墟)は、日本画の表現とかなり異なるものである。Aiko Itō; Graeme Wilson 訳は、イギリスにおける芸術の規範を通して『猫』の表現への理解を示したものだと考えられる。

(四)文章規範としての漢文脈

「写生文」より発展した『猫』には、漢語、故事成語が大量に使われている。この傾向は、日本における儒教の浸透で漢文が士人の基本的な教養となり、士人意識と緊密に結び付いている[41]ことに由来するものである。齋藤希史は、明治三十年代から四十年代にかけて文体に関する認識が変化していたことを次のように指摘している。

> 訓読体の隆盛から言文一致の道が開かれ、西洋文学の知識によって漢文脈の外部に根拠が発見され、もとより漢詩文的発想を時代遅れと見なす風潮もあり、ということで、条件はそろっていたのです。文章(エクリチュール)の重心が移動します。[42]

伝統的な文章規範としての漢文脈の定位の変化は、常体の「である」体を取る『猫』にも反映されている。例えば、『猫』において迷亭の伯父のような天保時代生まれの老人は、時代遅れの「漢学者」として登場する。「なあに漢学者でさあ、若い時聖堂で朱子学か、何かに凝り固まつたものだから」(p.121)。この箇所について、英訳本はそれぞれ“a scholar of Chinese classics”(p.104)“dedicated to Confucius”(p.100)と訳している。特に、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳は歴史上の有名な儒学者に関する補足の説明を付け加えている[43]。

---

41 齋藤希史(2020)『漢文脈と近代日本』角川ソフィア文庫、pp.16-46。
42 前注『漢文脈と近代日本』、p.230。
43 「朱子学」(p.121)を“the teaching of Chu-Tzu”(p.100)と訳し、「山陽」(p.63)(頼山陽)を“Sanyo”“that celebrated scholar of the Chinese classics”(p.52)

臺灣大學學術期刊資料庫

頼山陽の『日本外史』は「読みを意識した漢文」すなわち「朗誦しやすい漢文」[44]で広く受け入れられ、幕末期明治期にベストセーラとなった。このことを背景として『猫』に描かれる知識人たちは、よく朗読会を開き、文章を朗読の形で享受する。例えば、「朗読会と云ふと何か節奏でも附けて、詩歌文章の類を読む様に聞こえます」（p.51）という表現が見られる。朗読会で読まれる「白楽天の琵琶行」「蕪村の春風馬堤曲」（p.51）（漢詩形を入れた俳詩）について、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳“Hakurakuten’s poem”（p.41）、“Buson’s free styled verse *Simpu Batei-kyoku*”（p.42）という訳は固有名詞の名称だけ示している。一方、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳“Po Chu-i’s Lute Song”、“Buson’s mixture of haiku and Chinese verse”（p.41）が、唐詩のタイトルやジャンルの中身を伝えている。さらに、作中に出た「論語」（p.89）という言葉について、二つの英訳とも「論語」を“Analects of Confucius”（p.74）（p.71）と訳している。以上の例から窺えるように、漢文脈における固有名詞について、二つの英訳とも原文の意味を読者に伝えようとする。

漢文脈が『猫』において諧謔な文脈に置かれているという側面も見られる。例えば、学校の教師を務める主人苦沙彌が猫に「夫子」という孔子を指す言葉で呼ばれる。放蕩家のことを羨ましがったが、水彩画さえうまくできない主人のことについて、猫は「水彩画家は無論夫子の所謂通人にもなれない質だ」（p.18）と判断した。「夫子」という言葉はそれぞれの英訳において、“one”（p.13）“that stuff”（p.14）と訳されていることで、漢文脈の存在がはっきりしない。しかし、「昔人も夫子の道一以て之を貫く、忠恕のみ矣と云はれた事がある。」（p.328）という孔子を指す意味が窺える箇所に関して、英訳本の両方とも「夫子」を「孔子」の意味で訳している。ただし、「恕」の概念をめぐる Katsue Shibata; Motonari Kai 訳“forgiveness”（p.268）と Aiko Itō; Graeme Wilson 訳“understanding of the needs of other beings”

に訳している。

44 前注『漢文脈と近代日本』、p.66。

臺灣大學學術期刊資料庫

（pp.284-285）との違いがある[45]。後者のほうが孔子の「忠恕違道不遠，施諸己而不願，亦勿施於人。」[46]（『中庸』13 章）という意味を正しく訳し出している。つまり、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳が中国の古典についてより詳細な考察を行った上での翻訳成果である。

けれども、一部の漢文脈の持つ意味が把握されていない傾向も見られる。『猫』に現れる大量の故事成語は、中国の古典に由来するものが多い。紙幅の関係で全て挙げられないが、前記の問題を示す例を取り上げる。「吾輩はいつでも此所へ出て浩然の気を養ふのが例となつて居る」（p.12）「浩然の気を養ふ」の出典は、《孟子・公孫丑》における「我知言，我善養吾浩然之氣」にある。「其為氣也，以大至剛，以直養而無害，則塞於天地之間。」[47]が説明である。Katsue Shibata; Motonari Kai 訳は「浩然」を自然環境の修飾語として、“enjoy magnanimous surrounding”(p.8)と訳した。一方、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳は、人間に対する猫の敵愾心に着眼し、「士気を養う」という意味で“It is my custom to go there whenever my morale needs strengthening”(p.9)と訳している。そこから、中国古典の自然観に関する日本語や英語を母語とした訳者の認識の欠落が窺える。

（五）キリスト教による仏教語への理解

猫が破られた竹垣の穴のおかげで苦沙彌の家に入ることができた。そこで、猫は「一樹の蔭とはよく云つたものだ」（p.5）と考えた。故事成語の「一樹の蔭一河の流れも他生の縁」とは、仏教で「前世からの因縁」[48]を意味する諺である。この冒頭の表現と最後の猫の死の場面で唱えられる「南無阿弥陀仏」が因果関係を示している。本論はその宗教性の翻訳に着目したい。「一樹の蔭」という表現につい

[45] 完全の訳文は次の通りである。“Our ancestors greatly admired the moral lessons of Confucius, and practiced faithfulness and forgiveness.”（Katsue Shibata; Motonari Kai 訳, p.268）“Our own forebears were proud to be guided by the teachings of Confucius, which in every context emphasize the importance not only of faithfulness, but of understanding of the needs of other beings;”（Aiko Itō; Graeme Wilson 訳, pp.284-285）

[46] Donald Sturgeon「『中庸』」「中國哲學書電子化計劃」（電子データベース）。

[47] 前注 Donald Sturgeon「『孟子・公孫丑』」。

[48] 左秀靈編（1981）『日本諺語成語辭典』名山出版社、p.20。

臺灣大學期刊資料庫

て、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳は“It is well said that every tree may offer shelter.”(p.2)という直訳を行った。一方、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳は“I realize how true the adage is that what is to be will be”(p.4)（私は「事の成り行き」という格言の意味を悟った）と訳した。後者は仏教術語における「因縁」という概念を説明するよりも、キリスト教の「預定説」（Predestination）[49]の存在する文化圏の読者にとって理解しやすい「定められた運命」という概念で訳している。

キリスト教の観念による仏教への理解は、『猫』の英訳の全般に浸透している。原作の中には、西力東漸の結果としてのキリスト教の浸透が、「耶蘇教の神は二十世紀の今日迄も此全智全能の面を被つて居る」(p.189)「天地万有は神が作つたさうな、して見れば人間も神の御製作であらう、現に聖書とか云ふものには其通りと明記してあるさうだ」(p.189-190)で紹介されている。この箇所について、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳は“The God of the Christians”(p.155)と訳し、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳は“the Christian God”（p.158）と訳している。しかし、この箇所はあくまでもキリスト教に関する猫の認識の一端を直訳したものである。それに対して、仏教語が現れる箇所、例えば、三毛子の葬式の場面における「チーン南無猫誉信女、南無阿弥陀仏」(p.69)という箇所について、前者は“Namu-Myoyo-Shinnyo, Namu-Amidabutsu.”(p.69)と音読みで訳している。後者は日本の信仰の複雑さに対するオリエンタルな視線で滑稽な雰囲気を醸し出すためか、“Amen! Myōyoshinnyo. Save us, merciful Buddha! May she rest in peace.”(p.67)というように、強引にキリスト教の言葉を付加させた。また、三毛子の死の責任者と思われていた「吾輩」に対する彼女の主人の「罪が深いんですから、いくら難有い御経だつて浮ばれる事は御座いませんよ」（p.85）という言葉がある。前者の訳では“—he has sinned so much that no amount of prayer would do him any good.”(p.70)と訳され、後者の訳では“So very sinful a creature. Madam,

[49] 馬場嘉市（1953）『聖書大辞典』新教出版社、pp.1244-1245。

臺灣大學學術期刊資料庫

would never be able to rest in peace, however many edifying texts were read for its salvation."(p.69)と訳されている。"prayer"(祈祷)、"salvation"(救世主による救済)といった言葉から窺えるように、「罪」に対する視線には原文との観念上のずれが認められる。

猫の自己描写にも仏教に関連する箇所がある。例えば、「尻尾大明神」(p.127)は英訳でそれぞれ、"the God of Tails"(p.109)"Great Tail Gracious Deity"(p.105)と訳され、「猫大明神」(p.159)はそれぞれ、"the cat, the Supreme God"(p.133)"Supreme Cat Deity"(p.133)と訳されている。どの訳にもキリスト教の信仰が反映されている。さらに、「吾輩の尻尾には神祇釈教恋無常は無論の事満天下の人間を馬鹿にする一家相伝の妙薬が詰め込んである。」(p.126)という表現について、「神祇釈教恋無常」が和歌俳句の部分けであるのはさておき、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳は"I can enchant not only God, Buddha, love, and death, but all the people in the entire world."(p.108)と訳し、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳は"packed within my tail I carry not only the power of God, Buddha, Confucius, Love, and even Death, but also an infallible panacea for all ills that could bewitch the entire human race."(p.104)と訳している。「教」が「儒教」を指すという箇所を後者が訳し出している。けれども、どの訳でも日本神道における多神思想は考慮されていない。「恋」もキリスト教の神の「愛」とは異なる。さらに、「無常」は必ずしも「死」を意味しない。その誤訳の中には、キリスト教の信仰が意図的に選択される傾向が見られる。

それでも、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳がキリスト教の範疇を出たような訳し方は何箇所かで見られる。「吾輩の考によると大空は万物を覆ふ為め大地は万物を載せる為めに出来て居る。」(p.141)この箇所の「大空」は仏教語で、「東西南北と四維と上下」[50]を指す言葉である。(猫は「空」だと誤解している。)それについて、Katsue Shibata; Motonari Kai 訳は"Great Heaven was made to shelter all creation"(p.121)

[50] 中村元(2009)『広説仏教語大辞典』(中巻)東京書籍株式会社、p.1108。

臺灣大學學術期刊資料庫

と訳した。一方、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳は“the sky was made to shelter all creation”(p.120)と原文の意味を伝えている。また、「彼の一家は真宗で、真宗では仏壇に身分不相応な金をかけるのが古例である。」(p.154)という箇所では、「仏壇」を“family altars”(p.130)(家の聖餐台)と訳した前者と異なり、後者は原文の意味に即して“household shrines”(p.130)と訳している。そして、「成仏する」(p.208)(俗に「死」の意味)を、キリスト教の理解で“become a spirit”(p.168)と訳した前者と異なり、この世を離れるという意味で“a departure”(p.172)という言葉を選んだ。

それにもかかわらず、英訳本の両方ともキリスト教によるアジア文化圏の理解を抜けていない。特に、「空」と「天」といった言葉はキリスト教の世界観で理解されている。「空の縄張が不当なら」(p.141)という空間に関する表現は、前者の訳では“if heaven cannot be restricted”(p.121)、後者の訳では、“if enclosure of the empyrean is not regarded as just in natural law”(p.120)となっている。“heaven”(天国)、“empyrean”(神と天使が住む最高天)、“natural law”(神の定めた自然の法則)から窺えるように、キリスト教の意味が含まれている。前項目の補足にもなるが、その翻訳の仕方は、儒教における「天」という言葉にも及んでいる。漱石は江戸時代の政治思想家、荻生徂徠の(1666～1728)の漢学の集大成である『蘐園随筆』(1714)を愛読[51]していた。この本の中には、人間の規範としての「天」の思想[52]が書かれている。『猫』では、「大きく云へば公平を好み中庸を愛する天意を現実にする天晴れな美挙だ」(p.123)という表現が見られる。しかし、そこの「天意」は Katsue Shibata; Motonari Kai 訳で“God favors”(p.106)と訳され、Aiko Itō; Graeme Wilson 訳で“the will of Heaven”(p.101)と訳されている。また、「天の恵」(p.23)という表現もあるが、後者のほうが英訳の文脈において“heaven”(p.19)を入れ

[51] 夏目漱石(2017)『漱石全集』12 巻、岩波書店、p.375。
[52] 「聖人之道人道也。而以天為則。以天為則亦人之道也。」(物茂卿[荻生徂徠]著(1714)『蘐園随筆』4 巻附文戒 1 巻、江戸出雲寺和泉。)

臺灣大學圖書館日文資料庫

ている。猫と餅の戦いの場面で出た「天祐」(p.39) については、前者は“grace of Heaven”(p.30)と訳し、後者は「神の加護」の意味で“Special Providence”(p.31)と訳している。以上のように、英訳本には仏教語の翻訳は見られるが、基本的にキリスト教の語彙で仏教語を訳すストラテジーが取られている。

四、結論

本論文は、「翻訳の不可能性」を重要視する Apter の論考を踏まえ、原作『吾輩は猫である』と Katsue Shibata; Motonari Kai 訳 *I Am A Cat* と Aiko Itō; Graeme Wilson 訳 *I Am a Cat* について、主体性、ジャンル、芸術、文章規範、宗教を中心に、個別の事例で考察と分析を行った。具体的内容は本論で詳述している通りである。研究の結果として、英訳の通時的変化から、主体性の強調、ジャンルに対する形式的側面の重視、芸術の理解におけるパラダイムの存在、アジアの文化背景に関する調査の深化、キリスト教というカノンの支配的な価値観の反映といった翻訳の特質を見出した。英訳に見られる「非翻訳」、「誤訳」、「比較不可能性」は、ある程度、英語圏のアジア認識を反映しているが、英訳の内容が英語圏の読者にアジアとの対話の可能性を十分にもたらしたとは言えない。原作と英訳の内容を分析した本研究の考察の結果を、異なる文化圏における相互理解の橋架けとしたい。

【付記】本稿は科技部新進人員專題研究計畫經費「MOST 111-2410-H-002-009-」の助成を受けた研究成果の一部である。取得した資料を参考し、「2021 年臺灣大學日本語文創新國際學術研討會」(2021 年 10 月 16 日) における口頭内容の発表を大幅に修正・加筆したものである。口頭発表、及び論文審査の際に、貴重なご意見をくださった先生方に対して、心より感謝を申し上げます。

臺灣大學學術期刊資料庫

【参考文献】

【テクスト】

Burns, R. (1896). *Poetical Works of Robert Burns: The Poems, Epistles, Songs, Epigrams and Epitaphs*. Ed. by J. A. Manson. 2 vols. London: Clement Wilson.

Sōseki Natsume. *I Am a Cat I*. Trans. Aiko Itō; Graeme Wilson. Boston: Tuttle, 2002; Tokyo: Tuttle, 2002.

Sōseki Natsume. *I Am A Cat*. Trans. Katsue Shibata; Motonari Kai. In collaboration with Harold W. Price. Tokyo: Kenkyusha, 1961; London: Peter Owen, 1971; New York: Putnam, 1982.

高浜虚子（1918）『漱石氏と私』アルス。

夏目漱石（2017～2020）『漱石全集』1～28 巻＋別巻、岩波書店。

正岡子規（1975）『子規全集』第 4 巻、講談社。

物茂卿［荻生徂徠］著（1714）『蘐園随筆』4 巻附文戒 1 巻、江戸出雲寺和泉。

【データベース】

Donald Sturgeon「中國哲學書電子化計劃」（https://ctext.org/zh）

早稲田大学図書館古書文庫（https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho）

【単著と論文】

Apter, E. (2013). *Against World Literature: On the Politics of Untranslatability*. London, New York: Verso.

Venuti, L. (2008) *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. New York: Routledge.

齋藤希史（2020）『漢文脈と近代日本』角川ソフィア文庫。

塩野加織（2020）「ユネスコによる日本文学代表作品翻訳計画――その成果と課題」『越境する歴史学と世界文学』臨川書店、pp.185-194。

塚本利明（2018）『漱石と英文学 II』彩流社。

西村好子（1998）『散歩する漱石』翰林書房。

法政大学国際日本学研究所編集（2010）『翻訳の不可能性』法政大学

臺灣大學學術期刊資料庫

国際日本学研究センター。
森まゆみ（2017）『子規の音』新潮社。
山本史郎（2020）『翻訳の授業』朝日新聞出版。

【辞書・事典】

泉田昭ほか編（1985）『新聖書辞典』いのちのことば社。
左秀靈編（1981）『日本諺語成語辭典』名山出版社。
中村元（2009）『広説仏教語大辞典』（中巻）東京書籍株式会社。
馬場嘉市（1953）『聖書大辭典』新教出版社。
前田勇（1975）『江戸語大辞典』講談社。
松島正一編（1995）『イギリスロマン主義事典』北星堂書店。

【付録】

「表一」（「俳句」関連の表現、下線は筆者によるものである。）

原文	Katsue Shibata; Motonari Kai 訳	Aiko Itō; Graeme Wilson 訳
猫の春一日といふ俳句（p.24）	a poem: “A peaceful day in spring when cats read and dance.”(p.18)	a *haiku* stating that “on spring days cats read books or dance.”(p.20)
「俳句にはなるかも知れないが、恋にはならん様だな」（p.26）	“You might be able to make a poem about such an experience, but being toothless won’t get you anywhere with the girls.” (p.20)	“An image possibly appropriate to a *haiku* but scarcely appropriate to the pursuit of love,”(p.21)
材料は日本派の俳人だらう（p.50）	if they used a bunch of Japanese *Haijin* [a Nihon school of poets](pp.40-41)	Tochian (who, as you know, is a *haiku* poet of the Nihon School)(p.41)

臺灣大學學術期刊資料庫

右の如く謡曲会、俳句会、短歌会、新体詩会等、会の連発にて当分の間（p.56）	I am also going to take part in various *no* recitations, in some epigrammatic poem parties, in a few classical ode gatherings, in some modern poetry teas, and in other affairs.(p.46)	So you see, because of these incessant parties, —*nō*-song parties, *haiku* parties, *tanka* parties, even parties for New Style Poetry, and so on and so on, I am perpetually occupied for quite some time.(p.46)
世間には猫の恋とか称する俳諧趣味の現象があつて、春さきは町内の同族共の夢安からぬ迄浮かれ歩るく夜もある（p.184）	According to my understanding, we often go out at night, especially in the spring, in search of romance.(p.150)	It has come to my ears that *haiku* poets have taken to using the phrase “cat’s love” as a means of indicating that a poem is concerned with the season of spring.(p.153)
俳体詩を知らないのか、（p.162）	You don’t know what a poem is?(p.135)	Do you mean to say you’ve never heard of the current experiments in the composition of extended *haiku*?(p.136)
俳劇（p.256） 俳句趣味の劇	a poem-play(p.207) It’s a play along poetic lines.(p.207)	a *haiku*-play A play imbued with the spirit of *haiku*.(p.214)
上田敏君の説によると俳味	According to Bin Ueda’s theory, all	Ueda Bin is constantly pointing out in his essays

臺灣大學學術期刊資料庫

とか滑稽とか云ふものは消極的で亡国の音ださうだ（p.258）	poems and comics should be abolished because they can ruin a nation.(p.208)	and articles that the spirit of *haiku*, as also indeed the comic spirit, lacks constructive positivism. (p.216)
あまいとからいと反照する所なんか十七味調唐辛子調で面白い。（p.262）	The contrast between ‘sweet’ and ‘bitter’ is especially interesting in that it has tang of seventeen spices mixed with pepper.(p.212)	the skill with which you have made ‘bitter’ and ‘sweet’ reflect each other is as interesting as if you had spiced each syllable of a *haiku* with seventeen different peppery tastes.(p.220)

臺灣大學學術期刊資料庫